

第Ⅲ部 実践編

愛知県立惟信高等学校の取組（外国語（英語）科）

ースピーキングテスト、ライティングテストにおける ルーブリックの妥当性・信頼性に関する調査研究ー

1 はじめに

本校が「高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」に取り組み始めてから3年目となり、本年度が研究の最終年度となる。1年目はスピーキングテスト、ライティングテストといったパフォーマンステストの実施とルーブリックを用いた評価、CAN-DOリストの作成等を中心に研究を進めた。2年目は、次の段階として、長期的な視野に立った学習指導計画、指導と評価の一体化といった課題に取り組んだ。結びの年となる本年度は、これまでの取組を全学年に広げたことに加え、ルーブリックの妥当性・信頼性を追究するために、新たにJTE（日本人教員）とALTの共同による研究も行った。ここでは、本年度の取組を中心にしながら、3年間の取組を総括する。

2 研究の目的

学習指導要領で示されているコミュニケーション能力の育成を図るため、外国語（英語）科の学習活動について、学習到達目標を明確にしたパフォーマンス課題及びルーブリックを作成し、評価を行う。この評価手法の妥当性・信頼性を高め、生徒の資質・能力の向上を図るための実践的な調査研究を行う。

また、長期的な視野に立った学習指導の実現に向けて、3年間の学習到達目標であるCAN-DOリストを、1年ごとの年間学習指導計画へ、そして単元ごとの指導計画へと関連付けていくための実践的な調査研究を行う。

さらに、指導と評価の一体化という観点から、授業における言語活動を充実させるとともに、言語活動によって生徒が身に付けた力を適切に評価する方法に関する実践的な調査研究を行う。

3 研究の概要

(1) 今年度の研究内容

ア 研究組織

英語科教員を中心に校内研究委員会を組織し、月1～2回程度、会議を開催した。本研究の計画・運営について審議するとともに、英語教育に関する研究協議及び情報交換を行った。また、明治大学国際日本学部の尾関直子教授から、研究全般に関して、随時指導を受けた。

イ スピーキングテスト

「外国語表現の能力」のうち「話すこと」の評価を行うために、各学年でスピーキングテストを実施し、ルーブリックを用いて評価を行った。実施回数は、1年生3回、2年生2回、3年生1回とした。スピーキングテストはそれぞれ20点満点の試験として扱い、評価結果を成績に反映させた。

また、評価結果の再検討を想定し、テスト中のやりとりはICレコーダーで記録し、保存した。

ウ ライティングテスト

「外国語表現の能力」のうち「書くこと」の評価を行うために、各学年でライティングテストを実施し、ルーブリックを用いて評価を行った。実施回数は、1年生3回、2年生1回（3段階に分けて実施）、3年生1回とした。ライティングテストはそれぞれ20点満点の試験として扱い、評価結果を成

績に反映させた。

エ ルーブリック

イ・ウのパフォーマンステストを実施する際、ルーブリックを用いた評価を行い、評価の過程や結果を検証することにより、評価の妥当性・信頼性を高めるための方策を研究した。また、学習指導の過程でも、生徒にルーブリックを示して目標（どんなことができるようになるのか）を意識させるなど、ルーブリックを効果的に活用するための研究にも取り組んだ。

オ 長期的な視野に立った学習指導計画（巻末資料⑧）

長期的な学習指導計画を一つ一つの授業に反映させるために、高校3年間の学習到達目標であるCAN-DOリストを年間学習指導計画へ、年間学習指導計画を單元ごとの指導計画へと反映させた。具体的には、年間学習指導計画の各單元にCAN-DOリストの能力記述文（以下、「CAN-DOステイメント」という）を記載し、どの單元でどのCAN-DOステイメントを扱うのかを示した。これにより、年間学習指導計画の全体像が俯瞰できるようになっただけでなく、学習到達目標を踏まえた單元ごとの指導計画の作成が行いやすくなった。

カ 指導（授業）と評価（テスト）の一体化

指導と評価の一体化に向けて、一つ一つの授業とテストとの結び付きを意識した学習指導を心がけた。特に、学習到達目標を基点として、その目標に向けて、どのように授業の流れをつくっていくのかについて研究を進めた。また、形成的評価という観点から、授業の中で生徒に与える評価やテストの評価結果を、その後の指導に生かしていくための方策についても研究した。

キ 自己評価、相互評価の充実

授業プリントに自己評価・相互評価のためのルーブリックを導入することにより、生徒の内省を促し、生徒自身の「メタ認知的活動」を促すよう試みた。

ク ポートフォリオ

第1・2学年の生徒全員にファイルを用意させ、ライティング等の作品や授業でのプリントを保管させた。試験的に実施している段階であるため、学校全体としてのまとまった取組とはなっていないが、生徒自身に自らが学んできた過程を振り返る機会を与えるとともに、学習履歴管理の習慣を身に付けさせるきっかけとなるよう、各教員が効果的な活用方法を模索した。

ケ プロセス・ライティング

プロセス・ライティングは、一度書いた作品を評価して終わりにするのではなく、「生徒による作品の提出」→「教員による添削・コメント」→「生徒による書き直し」というやりとりを何度も繰り返して最終的な作品を完成させていく指導方法である。本校ではライティングテストや、その他の英作文の指導で、このプロセス・ライティングの手法を積極的に活用した。

コ 訪問調査

(ア) 大阪府教育センター附属高等学校

「高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」の研究校である、大阪府教育センター附属高等学校を訪問し、授業参観と研究協議を行った。授業の初めに「本時の目標とルーブリック」を示している点や「スピーチコンテストに向けて」という大きな目標をもたせている点など、ルーブリック活用の実践例や言語活動を充実させていくための方策などの幅広い内容を学んだ。

(イ) 奈良県立桜井高等学校

平成24年度から文部科学省事業「英語力を強化する指導改善の取組」の研究指定を受けている奈良県立桜井高等学校を訪問し、授業参観と研究協議を行った。コミュニケーション活動を円滑に行うた

めの雰囲気づくり，オールイングリッシュの授業を実現し，言語活動を充実させるための方策，パフォーマンステストと評価の在り方など，さまざまな工夫や取組を学んだ。

サ JTEとALTの共同によるルーブリック作成及び評価に関する研究

JTEとALTがルーブリックの作成を共同で行うことにより，妥当性・信頼性のあるルーブリックを作成するために必要な視点を明らかにするとともに，共同で作成したルーブリックを用いて生徒の作品を評価することにより，JTEとALTの評価の共通点・相違点を分析・考察することを目的とし，研究を行った。

(2) 研究の経過及び予定

6月22日（月） 大阪府教育センター附属高等学校訪問

6月23日（火） 奈良県立桜井高等学校訪問

1月28日（木） 成果発表会…研究授業，成果発表，大学教授による指導（惟信高校）



ペアワークの様子



グループワークの様子



スピーキングテストの様子



JTEとALTの協議の様子

4 研究の実際

(1) スピーキングテスト

ア 第1学年 スピーキングテスト

	第1回	第2回 (巻末資料①)	第3回
ねらい (学習 到達 目標)	前もって発話することを用意した上で、限られた身近なトピックについて、基礎的な表現を用いて、簡単な情報を伝えたり意見を言ったりする。 絵を見て、状況を基礎的な語句や構文を用いて簡単に描写する。 【CAN-DO】 話すこと (発表) 1-2, 1-3, 1-5	前もって発話することを用意した上で、限られた身近なトピックについて、基礎的な表現を用いて、簡単な情報を伝えたり意見を言ったりする。 絵を見て、状況を基礎的な語句や構文を用いて簡単に描写する。 【CAN-DO】 話すこと (発表) 1-2, 1-3, 1-5	前もって発話することを用意した上で、限られた身近なトピックについて、発表する。 【CAN-DO】 話すこと (発表) 1-5
実施 方法	①質問リストを事前に生徒に提示 (テストの1週間前に配付・説明) し、当日までに生徒同士で練習して準備するよう指示する。評価の観点も事前に伝える。 ②テストは別室で個別に実施する。試験官役の教員は、質問リストの中から三つの質問 (問A～問C) を選び、インタビュー形式で質問する。 ③基本的にはその場で評価をするが、インタビューの内容を録音しておき、必要であれば、事後に他の教員と協議し、評価する。	①質問リストを事前に生徒に提示 (テストの1週間前に配付・説明) し、当日までに生徒同士で練習して準備するよう指示する。評価の観点も事前に伝える。 ②テストは別室で個別に実施する。試験官役の教員は、質問リストの中から三つの質問 (問A～問C) を選び、インタビュー形式で質問する。 ③基本的にはその場で評価をするが、インタビューの内容を録音しておき、必要であれば、事後に他の教員と協議し、評価する。	①テスト内容とルーブリックを事前に生徒に提示し、当日までに準備するよう指示する。 ②第3回ライティングテストでの作品 (冬休みの思い出について) を原稿として、クラス全体の前で発表する。
評価の 観点	・①積極性、②質問を正しく理解しているか、③伝えたい内容を英語で表現できているか、④正確さ (文法のミスがないか)、⑤2文で答えているか (問Cのみ) という観点で評価する。 ・評価は各質問に対する解答を点数化する形式で行う。	・①積極性、②質問を正しく理解しているか、③伝えたい内容を英語で表現できているか、④正確さ (文法のミスがないか)、⑤3文で答えているか (問Cのみ) という観点で評価する。 ・評価は各質問に対する解答を点数化する形式で行う。	2月に実施
評価の 結果	・全体の平均点は20点満点中、17.2点と高得点であった。	12月に実施	2月に実施
所感 反省 課題	・インタビュー形式のテストに慣れておらず、緊張して文法的な誤りをする生徒が多くいた。 ・1学期に学んだトピックや文法項目を積極的に反映させた質問を用意したことにより、生徒に繰り返し学ぶ機会を与えることができ、既習事項を定着させることにつながった。	12月に実施	2月に実施

イ 第2・3学年 スピーキングテスト

	第2学年第1回 (巻末資料②)	第2学年第2回	第3学年第1回 (巻末資料③)
ねらい (学習 到達 目標)	写真や絵、地図などの視覚的補助 を利用して、一連の簡単な語句 や文を使って、自分の毎日の生活に 直接関係のあるトピック (自分のこ と、学校のこと、地域のことなど) について、短いスピーチをすること ができる。 【CAN-DO】 話すこと (発表) 2-4	基本的な語や言い回しを使って、 人を誘ったり、誘いを受けたり、 断ったりすることができる。 【CAN-DO】 話すこと (やりとり) 2-5	使える語句や表現をつない で、自分の経験や夢、希望を順 序立てて、話を広げながら、あ る程度詳しく語ることができる。 【CAN-DO】 話すこと (発表) 3-5
実施 方法	①修学旅行についてのスピーチを 行う。現地で写真を撮るなどの準 備をするよう、修学旅行の前に指 示する。 ②修学旅行の後に、授業を1～2時 間程度利用して、テストの実施方 法の説明と原稿作成を行う。 ③授業を1～2時間程度利用して、 クラス全体の前で発表を行う。 ④評価はその場で行う。生徒は相互 評価を行う。発表の様子をICレ コーダー (若しくはビデオカメラ) で記録しておき、必要であれば、 事後に他の教員と協議し、評価 する。	①指定された条件の下で待ち合わ せ日時と場所を決めるタスクを、 ペアで行う。 ②教員がモデルダイアログを提示 し、評価の観点を事前に説明す る。 ③授業を利用して、20分程度の事前 練習を3回行う。 ④授業を1時間程度利用して (数回 に分けてもよい)、ペアで会話を させる。ペアは名簿順で組む。1 ペア当たり2分以内とする。 ⑤評価はその場で行う。会話の様子 をICレコーダー等で記録して おき、必要であれば、事後に他の 教員と協議し、評価する。	①「高校生の制服着用賛成か 反対か」というテーマについ て、スピーチを作成し、発表 する (ライティングテストと 同じテーマとする)。 ②発表時には、視覚的補助とし て、ポスター等をA3判で1 枚まで使用してよい。 ③テストは各教室で実施し、ク ラス全体の前で発表する。 ④基本的にはその場で評価を するが、発表の内容をICレ コーダー等で記録しておき、 必要であれば、事後に他の教 員と協議し、評価する。
評価の 観点	・ループリックを用い、①content (内容)、②voice (声の大きさ、 発音、アクセント)、③non-verbal communication (身振り手振り) ④memorization (記憶) という観 点で評価する。 ・全体で20点満点とする。そのう ち、①content の配点を10点と し、原稿を基に、前もって評価し ておく。 ・評価結果は1学期の成績に反映す る。	・ループリックを用い、①content (内容:個人)、②content (タス ク達成度:ペア)、③non-verbal communication (アイコンタクト、 身振り手振り)、④voice (発音、 抑揚) という観点で評価する。 ・全体で20点満点とする。 ・評価結果は2学期の成績に反映す る。	・ループリックを用い、①声量、 ②発表時間、③原稿を見ずに 発表できたか、④発音・強弱、 ⑤non-verbal communication、 ⑥視覚的補助を効果的に使 えているか、という観点で評 価する。
評価の 結果	・クラス全体の前で行うため、声の 大きさが懸念されたが、ほとんど 問題なく実施できた。 ・平均点は12.7点であった。 ・原稿を見ずに発表できた生徒はほ とんどいなかった。 ・発表の仕方の指導が十分できず、 ジェスチャーや抑揚を効果的に 付けることができる生徒は少な かった。	11月に実施	12月に実施
所感 反省 課題	・時間の制約があり、音読の指導ま で十分に行うことは難しかった。 ・原稿を生徒の実力だけで完成させ るのは難しく、教員が手を入れる 加減が難しかった。 ・Show and Tell 形式であるため、 持ち物を忘れた生徒への対応に 苦慮した。また、欠席した生徒へ の対応等、公平性を保つ工夫が必 要であると感じた。	11月に実施	12月に実施

(2) ライティングテスト

ア 第1学年 ライティングテスト

	第1回	第2回 (巻末資料④)	第3回
ねらい (学習到達目標)	日々の授業で身に付けた表現を利用して、自分自身の英語の先生を紹介する英文を書くことができる。 【CAN-DO】 書くこと 1-1 話すこと (やりとり) 1-2, 1-4	日々の授業で身に付けた表現を利用して、自分自身の好きな本や映画についての英文を書くことができる。 【CAN-DO】 書くこと 1-1, 1-2, 1-3	日々の授業で身に付けた表現を利用して、自分に直接関わりのある環境での出来事についての英文を書くことができる。 【CAN-DO】 書くこと 1-1, 1-2, 1-3, 3-1 ※CAN-DO3-1については、第3学年での習得を目指して、第1学年から指導を始めている。
実施方法	①テーマは「私の英語の先生の紹介」とする。 ②授業時間を利用して、JTEまたはALTにグループごとにインタビューをする。 ③インタビューで得た情報を基に、個別に紹介文を書く。教員の添削指導を受ける。 ④授業を20分間利用して、紹介文を書く。	①テーマは「好きな本や映画の紹介」とする。 ②授業時間を利用して紹介文を書く。教員の添削指導を受ける。 ③授業を20分間利用して、紹介文を書く。	①テーマは「冬休みの思い出」とする。 ②冬休み課題として、英文を書く。その後、教員の添削指導を受ける。 ③授業を20分間利用して、最終作品を書く。
評価の観点	・①語数、②内容の一貫性、③文や意味の正確さの観点で評価する。 ・語数の下限を設定し、それに満たない場合は、各項目の最高点を下げる。	・①内容の構成、②文や意味の正確さの観点で評価する。 ・語数の下限を設定し、それに満たない場合は「②文や意味の正確さ」の項目の最高点を下げる。	・①内容の構成、②文や意味の正確さの観点で評価する。 ・語数の下限を設定し、それに満たない場合は「②文や意味の正確さ」の項目の最高点を下げる。
評価の結果	・平均点は20点満点中、17.7点であり、原稿をしっかりと覚えてきた生徒が多かった。 ・「②内容の一貫性」は全体的に高かった。 ・「③文や意味の正確さ」については、習熟度の高い生徒と低い生徒の間に差が見られた。	・平均点は20点満点中、16.0点であり、原稿をしっかりと覚えてきた生徒が多かった。 ・「①内容の構成」のうち、本論の部分で不備が目立つ生徒もいた。 ・「②文や意味の正確さ」については、習熟度の高い生徒の低い生徒の間に差が見られた。	1月に実施
所感 反省課題	・教員にインタビューすることと、その内容を踏まえて書くことで、「話す」「聞く」「書く」という複数の技能を統合した現実的な場面を設定することができた。 ・今後もインタビュー活動やそのレポートに取り組みしていくことで、生徒の英語力の質を高めることができると思われる。	・原稿を作成する際に、教科書で紹介されている表現をうまく活用させることができた。 ・本や映画の内容を紹介する部分について、要約することに慣れていない生徒にとっては難易度が少し高かったかもしれない。	1月に実施

イ 第2・3学年 ライティングテスト

	第2学年 第1回 (3段階に分けて実施) (巻末資料⑤)	第3学年 第1回 (巻末資料⑥)
ねらい (学習 到達 目標)	聞いたり読んだりした内容 (生活や文化の紹介などの説明や物語) であれば, 基礎的な日常生活語彙や表現を用いて, 感想や意見などを短く書くことができる。 【CAN-DO】 書くこと 2-3	自分に直接関わりのある環境 (学校, 職場, 地域など) での出来事を, 身近な状況で使われる語彙・文法を用いて, ある程度まとまりのあるかたちで, 描写することができる。 【CAN-DO】 書くこと 3-1
実施 方法	①授業において, 内容, 実施方法, 評価方法等の説明を行う。 ・テーマは「アメリカ人の友人に E-mail を書く」とし, 語数は 80 語以上とする。 ・段落構成を意識し, 「始めの言葉」「部活動について」「学校祭について」「その他学校生活について」「締め言葉」について, 順序立てて書くものとする。 ・プロセス・ライティングの要素を取り入れ, 「生徒による作品の提出」→「教員による添削・コメント」→「生徒による書き直し」を繰り返しながら, 最終作品を完成させる。 ②生徒は 1st draft を作成し, 提出する。教員は修正が必要な箇所にアンダーラインを付け, 20 点満点で採点して, 生徒に返却する。 ③生徒は 1st draft を基に, 夏休み課題として 2nd draft を作成し, 提出する。教員は誤りのある箇所を修正し, 20 点満点で採点して, 生徒に返却する。 ④授業を 20 分間利用して, 最終作品を書かせる。教員は 20 点満点で採点し, 返却する。	①テーマは「高校生の制服着用に関する賛成か反対か」とする。 ②自分の意見を述べるために必要な表現を提示し, 授業の中で使わせる機会をつくりながら, テストに向けて準備させる。 ③意見を述べるための適切な構成を, ひな形を示して指導する。 ④制服に関する問題意識を高めるため, グループに分かれて, 自分の意見を述べる機会をつくり, さまざまな立場の意見を分かち合う。 ⑤以下の五つの内容を含めるよう留意させる。 ・制服着用に関する自分の意見 ・その根拠 (なぜ制服 (または私服) がよいのか) ・自分の意見に対する反論 ・その反論に対する反論 ・まとめ
評価の 観点	・①語数, ②内容, ③構成, ④文法の観点で評価する。 ・1st draft, 2nd draft, 最終作品を, それぞれ 20 点満点で評価し, 計 60 点を 2 学期の成績に反映する。	・①語数, ②表現, ③文法, ④構成, ⑤内容, ⑥holistic impression (全体的な印象) の観点で評価する。
評価の 結果	・平均点は, それぞれ 20 点満点中, 1st draft で 14.4 点, 2nd draft で 15.8 点, 最終作品で 16.2 点であり, 「提出」→「添削・コメント」→「書き直し」を繰り返すことにより, ライティング能力の向上が見られた。 ・ルーブリックを用いて評価を行ったが, 教員間でずれが生じた。	・平均点は 20 点満点中, 12.2 点であり, 60%程度の得点率となった。 ・指導の重点項目と位置付けた「⑤内容」は, 8 点満点中の 6.0 点 (75%) であった。2 年次のライティングテストでは, 全体の得点率が 40%程度であったことを考えると, 今回, 事前指導の中で, 生徒同士の意見を共有させたことは, 内容を豊かにする上で一定の成果があったと言える。 ・「②表現」は, 6 点満点中 3.7 点 (62%) であり, やや物足りない結果であった。
所感 反省 課題	・プロセス・ライティングの要素を取り入れて実施したが, 教員が求める作品レベルと生徒の英語力の差が大きく, 教員が添削等で多大な労力を費やすこととなった。 ・真面目に取り組む生徒も多い一方, 欠席等で 1st draft, 2nd draft が提出できない生徒や, 暗記ができずテスト当日はほぼ白紙の状態での提出する生徒もいた。そうした生徒への対応策を検討すべきであると感じた。 ・教員間の評価のずれが少なからず生じたため, 対応策を考える必要性を感じた。 ・生徒の英語力に差があるため, 習熟度に合わせて, 類型・コースに応じたルーブリックを作成することも検討すべきであると感じた。	・ひな形を用いて指導をしたことは, 段落を効果的に用いて意見をまとめる力を養うことにつながった。 ・グループに分かれて互いの意見を共有することは, 問題意識を高めることにつながった。 ・グループで互いの意見を共有したためか, 提出された作品においては似通った意見が少なくなかった。 ・自分の意見を英語で表現するときに, 日本語で考えた内容を平易な英語で簡潔に表現することが, 十分できていない生徒が少なくなかった。

(3) プロセス・ライティングの活用

プロセス・ライティングは、「生徒による作品の提出」→「教員による添削・コメント」→「生徒による書き直し」というやりとりを何度も繰り返しながら、最終的な作品を完成させていく手法である。この手法は、最終的な作品よりも、何度も書き直すプロセス（過程）を重視しており、生徒の学習意欲を維持しながら、ライティング能力を向上させるのに有効である。本校では、この手法をライティング指導の核としており、ライティングテストだけでなく、さまざまなライティング指導の場で、積極的に活用して

いる。本年度の第2学年第1回ライティングテストでは、プロセス・ライティングの手法を全面的に取り入れ、指導と評価を試みた。なお、本来は、教員による添削を行う前に、生徒同士で互いの作品を見せ合い、フィードバックを与え合う手順が入るが、時間の都合で今回はこの手順を省略した。

課題としては、作品の添削を行う教員の負担が大きくなることが挙げられる。その対策として、誤りを訂正する際には、一人一人の全ての誤りを訂正することはせず、共通する誤りをクラス全体で共有したり、誤りのある部分をマーカーで示すだけにしたりするなど、教員の負担を軽減するとともに、生徒自身が考える余地を残すための工夫をしている。しかし、指摘された誤りを自力では訂正できない生徒も多く、その場合は教員が細かく訂正せざるをえない。教員に過度の負担をかけることなく、効果的に添削指導を行うための方策を研究していく必要がある。

(4) A L Tを活用したルーブリック作成及び評価に関する研究（巻末資料⑦）

英語で話したり書いたりする能力を評価するためには、J T Eだけでなく英語の母語話者であるA L Tの視点を採り入れることも重要である。しかし、実際には、ルーブリックはJ T Eが中心となって作成することがほとんどであると思われる。このような背景を踏まえ、J T EとA L Tが共同でルーブリックを作成することにより、妥当性・信頼性のあるルーブリックを作成するために必要な視点を明らかにするとともに、作成したルーブリックを用いて生徒の作品を実際に評価することにより、J T EとA L Tの評価の共通点・相違点を分析・考察することを目的に本研究を行うこととした。ここでは、「ルーブリックの作成」「ルーブリックを用いた評価の実際」の2項目に分けて、研究の内容や成果と課題について述べる。

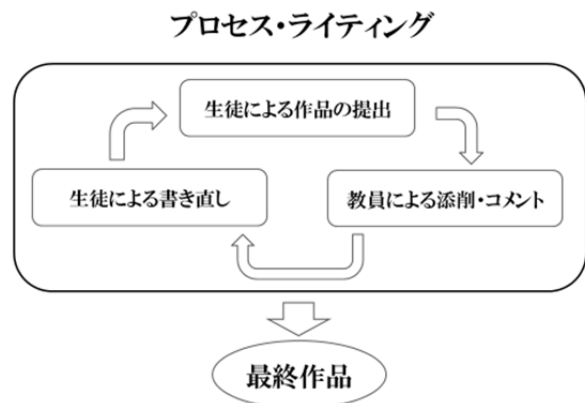
(4)-1 J T EとA L Tの共同によるルーブリックの作成

ア 概要

本校のJ T E（2名）と、本研究のために協力を依頼したA L T（2名）が、ルーブリック作成に関する理論（Brown, 2012）を参考に、ライティングタスクのルーブリックを共同で作成した。作成の各段階において、注目した点について以下に述べる。

①タスクの内容

タスクの内容は、本来はルーブリックを作成するJ T EとA L Tが作成することが望ましいが、今回は研究スケジュールの都合からJ T Eのみで作成した。本校の生徒にとっては、アカデミックなトピックよりも、身近なトピックの方が取り組みやすいと考え、「自分の好きなものについて紹介する英文を書く」という内容にした。



<タスクの内容>

【内容】

あなたの好きなものについて紹介する文を書きなさい。ただし、読み手にあなたの好きなものについて興味をもたせるように文章を構成しなさい。

※好きなものについては以下の中から選択してください。

本（漫画、雑誌、小説など）、映画、アニメ、音楽、歌詞、場所（観光地など）、ゲーム

【語数】

語数 70 語以上

【補足事項】

- ・ Introduction（導入）⇒Body（本体）⇒Conclusion（結論）という構成に沿って文章を書いてください。
- ・ 読み手にあなたの好きなものについて興味をもたせるには、あなたの書く文章に説得力が必要となります。説得力のある文章を書くためには、具体例や理由などを提示することが重要です。

②ルーブリックの種類

ルーブリックは、評価項目を複数設定して分析的に評価する analytic rubric と、評価項目を分けずに全体的に評価する holistic rubric に分類できる。身に付けさせたい力を事前に明確に示すことができる点、フィードバックにおいて、よかった点や改善を要する点を生徒に分かりやすく伝えることができる点から、本研究では、analytic rubric を作成することとした。

③評価項目の設定

評価項目の設定に当たっては、タスクの内容に焦点を当てて議論を行い、content（内容）、organization（構成）、grammar（文法）、vocabulary（語彙）、mechanics（構造）の5項目を設定した。

content については、タスクの指示に「説得力のある文章」「具体例や理由」とあることから、organization については、「Introduction（導入）⇒Body（本体）⇒Conclusion（結論）という構成に沿って」とあることから、JTE、ALTの双方が最も重要な項目であると考えた。

また、JTEからは grammar と vocabulary も重要であるという意見が、ALTからは spelling や punctuation などの mechanics も重要であるとの意見が出され、結果として、上記5項目を設定することとした。

④評価項目の配点

本タスクは20点満点で設定されており、これを五つの評価項目にどのように配分するかについて議論した。「読み手にあなたの好きなものについて興味をもたせるように」というタスクの指示を踏まえ、content の配点を最も高くし、次いで organization の配点を高く設定した。grammar や vocabulary については、content や organization に比べると重要度は低いと考え、項目ごとの配点を設定した。

⑤各評価項目の description の設定

各評価項目の配点を設定した後、評価基準に当たる description を設定した。JTEとALTで慎重に協議を行い、評価を行う際に迷うことがないような、客観性のある内容となるよう努めた。ALTもこのルーブリックを用いて評価を行うことから、description は英語で記述することとした。

イ 成果と課題

JTEとALTが共同でルーブリックを作成する過程においては、さまざまな発見があった。最も顕著だったのは、文章の構成（introduction・body・conclusion）や一貫性（coherence）の捉え方である。JTEがこのような点を軽視しているわけではないが、英語を母語として教育を受けてきたALTは、ライティングにおいて、文章の構成や一貫性を非常に重視していることが分かった。また、

一連の協議やルーブリック作成後に行ったアンケート調査において、妥当性・信頼性の高いルーブリックを作成するためには、タスクの目的を共通理解し、タスクを通して測定したい言語能力を明確にしておくことが重要であること、タスクとルーブリックは密接に関連しているため、ルーブリックを作成する場合は、タスク作成にも関わることが望ましいことなどを明らかにすることができた。

本研究においては、ルーブリックを作成する前にタスクが作成されていたため、タスクの目的が捉えにくかったとの意見があった。また、協力を依頼したALTは日頃から本校で指導しているALTではなかったため、本校のカリキュラムや生徒の状況を十分には理解できていなかったと思われる。それでも、ALTと協議しながらルーブリックを作成した意義は大きく、本研究で作成されたルーブリックは、ALTの視点を取り入れたルーブリックの一つのモデルとなると考えている。

(4)-2 JTEとALTの共同によるルーブリックを用いた評価の実際

ア 概要

タスクに基づいて生徒が作成したライティング作品を、ルーブリック作成から参加したALT 2名の㊗グループ（以下、㊗という）、ルーブリック作成から参加したJTE 2名の㊘グループ（以下、㊘という）、評価のみ参加したJTE 2名の㊙グループ（以下、㊙という）の3グループ（計6名）で評価した。評価結果を㊗、㊘、㊙のグループ別及び評価項目別に比較し、㊗、㊘、㊙の評価結果に共通点や相違点があるか、評価項目別の特徴があるか等について分析した。

イ 方法と結果

①データ収集

生徒55名にタスクを実施し、提出されたライティング作品について、上記6名の評価者がルーブリックに基づいて評価を行った。

㊗、㊘、㊙のグループ別及び評価項目別の評価結果の平均点は下表のとおりであった。なお、㊗と㊘は、この評価を行う前に、ルーブリックを共同で作成しただけでなく、別の生徒の作品を用いて評価基準のすり合わせを行った。

評価項目	㊗	㊘	㊙	平均	配点
content	2.33	2.16	3.01	2.50	6
organization	1.99	1.59	2.65	2.08	5
grammar	1.43	1.25	2.02	1.57	4
vocabulary	1.15	1.25	1.69	1.37	3
mechanics	1.35	1.31	1.17	1.28	2
total	8.25	7.57	10.55	8.79	20

②データ分析

上記のデータについて、*t*検定及びWilcoxonの順位差検定を行い、各評価項目において、平均点がグループ間で異なるかどうかを分析した。その結果、

- ・㊗と㊘は、organizationを除いて、有意差がない。
- ・㊗と㊙は、全ての項目において、有意差がある。
- ・㊘と㊙は、mechanicsを除いて、有意差がある。

ことが分かった（結果㊑）。

次に、㊗と㊘、㊗と㊙の間の判別を、一般化線形モデルの一種であるロジットモデルを用いて分析

した。その結果、㊸と㊹の間ではorganizationにおいて、㊸と㊺の間ではgrammarとmechanicsにおいて、違いが見られることが分かった（結果㉠）。

ウ 考察

結果㉡から、㊸と㊹の間には評価結果に大きな差はなく、㊸と㊺、㊹と㊺の間には差があることが分かった。これは、評価者によって、ルーブリックに対する理解に差があったためであると考えられる。㊸と㊹は、ルーブリックを作成する際に評価基準を綿密に確認していたことに加え、評価を行う前には別の生徒の作品を用いて評価基準のすり合わせを行っていた。一方、㊺は、評価を行う前にタスクとルーブリックの内容を簡単に説明されただけであった。このことから、評価者によるブレをできるだけ少なくし、評価の信頼性を高めるためには、評価者がタスクの作成、ルーブリックの作成の段階から関わることに加え、実際に評価を行う前に、評価基準について十分確認したり、幾つかの作品を評価して評価基準のすり合わせを行ったりすることが重要であると考えられる。

また、結果㉢については、㊸と㊹の間でorganizationの評価に違いが見られた。ルーブリック作成を共同で行っていたにもかかわらず、このような結果となった。ルーブリックのdescriptionを作成したり、評価基準のすり合わせを行ったりする際には、JTEとALTのorganizationに対する認識の違いに特に留意する必要がある。

本研究では、ルーブリックの作成から評価までの作業を、JTEとALTの共同で行った。本校はALT常駐校ではないため、これだけの作業を常にALTとともに行うのは容易なことではない。今後、JTEだけでもALTの視点を採り入れた評価ができるよう、更に研究を深めていきたい。

5 3年間の成果と課題

(1) 生徒の変化

第1・2学年では、パフォーマンステストを行った後に、生徒にアンケート調査を実施した。生徒の変化を把握するために、平成26年度入学生の第1学年第1回から第2学年第1回までのスピーキングテストのアンケート結果を以下に示す。

<設問1>スピーキングテストに向けて熱心に取り組みましたか。

	第1学年			第2学年
	第1回	第2回	第3回	第1回
1 熱心に取り組んだ	41%	35%	32%	18%
2 取り組んだ	49%	54%	53%	65%
3 あまり取り組んでいない	8%	8%	13%	15%
4 全く取り組んでいない	2%	3%	2%	2%

<設問3>スピーキングテストはスピーキング能力の向上に効果があったと思いますか。

	第1学年			第2学年
	第1回	第2回	第3回	第1回
1 強くそう思う	21%	23%	21%	13%
2 そう思う	62%	61%	58%	63%
3 あまり思わない	16%	13%	18%	21%
4 全く思わない	1%	3%	3%	3%

<設問2>スピーキングテストはよくできたと思いますか。

	第1学年			第2学
	第1回	第2回	第3回	第1回
1 強くそう思う	20%	21%	9%	3%
2 そう思う	54%	54%	46%	31%
3 あまり思わない	24%	22%	39%	60%
4 全く思わない	2%	3%	6%	6%

<設問4>スピーキングテストは話す力を向上させるために重要だと思いますか。

	第1学年			第2学
	第1回	第2回	第3回	第1回
1 強くそう思う	34%	31%	27%	17%
2 そう思う	57%	59%	57%	66%
3 あまり思わない	8%	8%	14%	15%
4 全く思わない	1%	2%	2%	2%

ほぼ全ての設問において肯定的な回答（1，2）が多数を占めており、生徒がパフォーマンステストを行う意義を十分に理解し、テストを動機付けとして学習に取り組んでいることがうかがえる。一

方、アンケート結果の推移を見ると、肯定的な回答が少しずつ減少してきていることが読み取れる。テストごとに内容や形式、難易度が異なるため、単純に比較することはできないものの、この変化については次の2点の要因が考えられる。1点目は、テストの難易度を徐々に上げたことが、生徒の意欲や自信に否定的な影響を与えていることである。2点目は、本校では学年が上がるにつれてパフォーマンステストの実施回数が減っていくため、生徒の英語学習の中でパフォーマンステストが占める割合が少しずつ低下していることである。今後も学年が上がるにつれて、こうした傾向が更に強まっていくことが考えられるため、本校の3年間の長期的な学習指導計画を改めて検討し直す必要がある。なお、アンケート調査については、ライティングテストでも実施しているが、おおむね同様の傾向が見られた。

また、教員から見た生徒の変化としては、パフォーマンステストを導入し、授業における言語活動を充実させたことにより、以前に比べて英語の授業に前向きに集中して取り組むようになったこと、英語を話したり書いたりする活動に対する抵抗がなくなってきたことなどが挙げられる。今後も生徒主体の言語活動を取り入れた学習指導を推進していきたい。

(2) 教員の変化

「長期的な視野に立った学習指導計画」「指導と評価の一体化」等を重点項目として取組を進めていく過程で、教員側にもさまざまな変化が生じた。まず挙げられるのは、「目指す生徒像の明確化」である。CAN-DOリストを作成する過程では、英語科教員を対象に「卒業までに生徒にどんな力を身に付けさせたいか」という内容のアンケートを実施し、その結果を基に、卒業時の目標、2年次の目標、1年次の目標を設定した。何度も協議を重ねる中で、「本校ではこんな生徒を育てたい」という目標が徐々に明確となり、目指す生徒像を教員間で共有することができた。さらに、このCAN-DOリストの作成がきっかけとなり、学習指導におけるインプットとアウトプットのバランス、4技能のバランスを意識するようになったり、生徒にどのような力を身に付けさせたいかを具体的に考えるようになったり、授業からテストへの流れを意識しながら指導するようになったりするという変化が現れた。

また、英語科全体として研究に取り組んできたため、指導方法や評価方法等に関する打ち合わせ、成果と課題についての意見交換等、教員同士でコミュニケーションをとる機会が増え、英語科全体のチームワークが向上した。さらに、全ての教員が同じ方針に基づいて学習指導を行ってきたことが、学校としての英語教育の質保証につながっている。

今後も学校として一貫した取組を継続していくためには、「教科指導」という視点からの研究に加え、管理職のリーダーシップに支えられた「組織づくり」「マネジメント」といった視点も重要であると考えている。

(3) ルーブリック

ア ルーブリックの活用

ルーブリックには、「評価基準」としての役割だけでなく、「学習の指針」としての役割もある。本校では、パフォーマンステストを実施する際に、生徒に事前にルーブリックを示し、何ができるようになるべきなのか、そのためにどのように準備すべきなのか、を具体的に提示するようにした。その結果、パフォーマンステストに対する生徒の取組が向上するという成果が見られた。

一方、パフォーマンステストの結果を生徒に伝える際に、どのようにフィードバックを行うのが効果的か、という点が課題となった。テストの結果をルーブリックという形で受け取り、生徒自身が次への改善点を具体的に見いだせることが望ましいが、現状のルーブリックでは、具体的に何ができて

いて、何が足りなかったのかが分かりづらい。ルーブリックには評価項目ごとの評価ができるという特長があるが、その特長を十分に生かしきれなかった。特にスピーキングテストは、その場限りの音声によるやりとりであるため、生徒のパフォーマンスが具体的な形としては残らない。そのため、ルーブリックによる評価結果を示しても、どの部分が原因となってその評価結果に至ったのかを具体的に示すことができなかった。スピーキングテストの内容をICレコーダーで記録したが、そうした記録を生徒一人一人に聴かせてフィードバックを行うことは、物理的に困難である。ルーブリックを活用した評価結果をどのように次の学習につなげていくべきか、が今後の研究課題である。

イ ルーブリックによる評価の信頼性の確保

複数の教員がルーブリックを活用して評価を行う場合、評価結果にある程度の差が出てしまうのはやむをえないことではあるが、その上で、評価者ごとの差を許容範囲内に収める工夫をすることが必要である。本校では、ルーブリックによる評価の信頼性を確保するために、次のように取り組んだ。

- ①事前に評価者全員で、テストのねらい、評価基準の捉え方等について十分に話し合いを行い、評価のイメージを共有する。
- ②各評価者がそれぞれの評価を行う前に、サンプルとして幾つかのパフォーマンスを全員で評価し、評価結果について協議する。
- ③評価に迷うパフォーマンスをリストアップし、それについての評価結果を共有する。
- ④後で評価結果を修正できるよう、パフォーマンスの様子をICレコーダー、ビデオカメラ等で記録しておく。

評価者同士が十分な打ち合わせをしなければ、評価結果に大きな差が出てしまうおそれがある。したがって、評価の信頼性を高めるためには、しっかりとした評価者トレーニングをしておく必要がある。

ウ ルーブリックの妥当性

ルーブリックを作成する際には、指導によってどのような力を身に付けさせたいのか、テストを通してどのような力を測りたいのかを明確にし、それを評価項目として整理して、的確な表現で記述する必要がある。研究を始めた当初は、測りたい項目を全てルーブリックに盛り込んだため、評価する際に苦勞した。例えば、コミュニケーションを行う上では、「正確さ (accuracy)」「流暢さ (fluency)」「明瞭さ (intelligibility)」が重要であるが、その全てを一回のテストで測ることは困難である。今回のテストを通して測りたいのはどの部分なのかということ、ルーブリックによってはっきりさせておかなければならない。この記述が曖昧なままであると、ルーブリックの妥当性は大きく揺らぎ、結果として信頼性の高い評価ができなくなる。そこで、どのような力を測るためのテストなのかという点をルーブリックで明らかにし、評価者全員がしっかりと認識できるようにした。

(4) パフォーマンステスト

ア スピーキングテスト

3年間にわたり、さまざまな試行錯誤を行う中で、スピーキングテストについては、1対1のインタビュー形式、クラスでの発表形式、ペアでのやりとり形式等、一定の形式ができてきたと考えている。スピーキングテストの実施に当たっては、テストの形式と内容を事前に具体的に提示しており、生徒がテストに対して十分な準備ができるように配慮した。英語への苦手意識が強い生徒にとっては、事前に形式等を具体的に示すことにより、取組への意欲を高めることができると考えたからである。現状のスピーキングテストは、何をどのように準備すべきかが明確であり、多くの生徒にとって「がんばれば、自分にもできる」と思える内容であるため、生徒の取組も比較的良好であった。その一方

で、教員側の反省の中には、「あらかじめ準備させた内容だけでなく、その場で考えさせて、即興で話させる要素を増やしてもよいのではないか」という声が目立った。生徒の意欲を維持しながら、即興的な表現力を測ることのできるテストとなるように、テストの形式や内容を工夫していく必要がある。

また、第1学年第3回スピーキングテスト、第3学年第1回スピーキングテストでは、ライティングテストで扱った題材を基にスピーチをさせるという試みをした。一つの題材について、「書くこと」と「話すこと」の二つの技能からのアプローチができるということから、有意義な取組であったという意見が多かった。

スピーキングテスト実施における最大の課題は、実施にかかる時間と試験会場の確保である。1対1のインタビュー形式の場合、1名当たり2分間として、1クラス当たり2単位分の授業時間を要する。それに加えて、試験会場と控室（課題学習をしながら待機させる）の二つの教室、2名の教員が必要となる。そのため、40人クラスでの実施は難しく、少人数クラスで実施することが多くなっている。また、クラスでの発表形式で実施する場合についても、少人数クラスと40人クラスでは、生徒全員に発表させるのに必要な時間が大幅に異なる。実施時間の問題を解決するための試みとして、ペアでのやりとり形式も導入しているが、テストでのパフォーマンスがペアの相手に左右されてしまうため、評価の信頼性・妥当性といった観点からはいまだ課題も多い。以上のことから、スピーキングテストは少人数クラスで実施するのが望ましいと感じている。

また、生徒によっては、基礎学力が十分に身に付いていないために、スピーキングテストにほとんど対応できない場合があった。こういった生徒に対する指導をどのように行っていくのかという点についても、今後検討していく必要がある。

イ ライティングテスト

ライティング指導をする際、先に述べたプロセス・ライティングの手法を取り入れ、何度も書き直しながらか最終的な作品を完成させる、という過程を重視した。第2学年第1回ライティングテストでは、生徒の作品を1st draft, 2nd draft, 最終作品の3段階で評価を行い、プロセス（過程）を評価に反映させる試みを行った。添削に多大な時間を要するというような課題も見られたが、同じテーマについて何度も書くという経験から、自分の英語がよくなっていくという実感を味わい、「次はもっとうまく書きたい」と感じる生徒も少なくなかったと思う。

また、ライティング指導においては、高校3年間という長期的な視野に立って、段階的な指導を行うよう工夫した。第1学年第1回ライティングテストでは「内容の一貫性」を評価項目に取り入れて、一貫性のある内容とするように促し、第2回以降のライティングテストでは、introduction, body, conclusionといった「内容の構成」を評価項目に取り入れ、相手に伝わりやすい論旨展開をするように求めた。このように、各学習段階で求める内容を評価項目として設定し、指導の方向性を明らかにした。

スピーキングテストの場合とは異なり、ライティングテスト自体は40人クラスでも支障なく実施できた。しかし、プロセス・ライティングでは、個々の作品の添削指導に非常に多くの時間がかかった。添削の仕方を工夫するなどして負担軽減を図ったが、少人数クラスでの実施がより充実した指導につながると考えている。

(5) 長期的な視野に立った学習指導計画

長期的な視野に立った学習指導を実現するために、3年間全体の目標であるCAN-DOリストを作成し、その内容を、1年ごとの年間学習指導計画、それぞれの授業の単元計画へと反映させた。

特に力を入れたのは、CAN-DOリストの内容を盛り込んだ年間学習指導計画の作成、CAN-

DOステイトメントの授業プリントへの記載といった取組である。これらの取組により、学習指導計画の全体像が俯瞰できるようになっただけでなく、単元ごとの目標が把握しやすくなり、授業におけるコミュニケーション活動の目的を明確に示すことができるようになる、といった成果があった。

課題としては、3年間にわたる学習指導におけるインプットとアウトプットのバランスが挙げられる。現行学習指導要領が適用される最初の学年となった平成25年度入学生については、1・2年次に、それまでインプットに偏っていた指導からの脱却を目指し、生徒にアウトプット活動をさせるための指導に多くの時間をかけた。アウトプットを中心とした指導については一定の成果はあったものの、第2学年終了までに身に付けさせたい語彙や文法知識が十分に習得できていないことが徐々に明らかになり、3年次に改めてインプットに重きを置いた指導を行わざるをえなくなった。こうした反省を踏まえ、3年間の学習指導計画全体を、長期的な視野に立って検討し直す必要性を感じている。

(6) CAN-DOリスト

本校のCAN-DOリストは、現行学習指導要領が実施された平成25年度に作成した。当時は、第2・3学年では旧学習指導要領が適用されており、さらに、コミュニケーション英語Ⅲの教科書は未完成という状況であった。そのため、手探りの中で3年間のCAN-DOリストを作成した。特に「読むこと」については、大まかな記述しかできず、改善の余地を残したままでの完成であった。その後、CAN-DOリストの改訂を行っていないため、現在では多くの教員が「CAN-DOステイトメントの中には授業に反映させづらいものがある」と感じている。また、CAN-DOリストはCEFR-Jと学習指導要領を参考にして作成したが、CAN-DOステイトメントの表現が抽象的であり、生徒には伝わりにくい、あるいは教科書の内容と結びつけにくい、という意見も出ている。

CAN-DOリストには、学習指導のシラバス、目指すべき学習到達目標、到達状況のチェックリストなど、さまざまな役割がある。CAN-DOリストを作成する際には、事前にCAN-DOリストの活用方法を明確にしておくことが必要であると感じている。本校では、どのように活用していくのかという視点をもたないままでCAN-DOリストを作成したため、活用しづらいものになっているのではないかと考えている。

本年度で現行学習指導要領も一巡するため、これまでの反省を踏まえて、CAN-DOリストの改訂を検討している。

(7) 指導と評価の一体化

指導と評価の一体化を実現するために、授業からパフォーマンステストへの流れを大切にすることに心がけてきた。パフォーマンステストで測りたい力を身に付けさせるために、授業における学習指導をどのように組み立てていくのか、という流れについては、一定の形が出来上がり、教員にも生徒にも定着してきたと感じている。

指導と評価の一体化を図るためには、まず初めに、評価（テスト）のイメージを教員間で共有することが大切であると考えている。学習指導計画を検討する際には、まずパフォーマンステスト及び定期考査の目標と内容を明確にするよう努めてきた。

課題としては、「5(3)ア ルーブリックの活用」でも触れたように、ルーブリックを活用した評価結果を事後の指導に生かしきれていない、という点が挙げられる。評価結果を効果的に活用していく方策を、今後検討していく必要がある。

(8) 自己評価、相互評価の充実

授業プリントにルーブリックを掲載し、自己評価や生徒同士の相互評価を日常的に行わせてきた。自分自身の学習状況やパフォーマンスを客観的に振り返る機会を与えることで、生徒のメタ認知を促

し、学習意欲を高めることができると考えたからである。また、ルーブリックを活用した相互評価を行わせることで、相手のパフォーマンスを分析的に見るようになるだけでなく、自分では気付かないような点に気付いたりすることにもつながる。生徒自身で評価を行うことは簡単なことではないが、振り返りを行う習慣を身に付けさせたり、生徒同士で認め合ったりする機会を与えたという意味では、有意義な取組になったと考えている。

6 おわりに

研究の最終年度となり、本研究に携わって3年目の終わりが近づきつつある。パフォーマンステストの実施とルーブリックを用いた評価を中心として、多岐に渡る取組を行ってきた。それらの成果と課題については、この報告書にまとめたとおりである。しっかりとした成果が確認できた取組がある一方で、いまだ課題が残る取組も少なからずある。いずれにしても、数々の試行錯誤を重ねる中で、多くのことを学ぶことができたと考えている。本研究は本年度で一旦区切りを迎えるが、今後もこれまでの取組を見直し、さらに研究を重ねながら、学習指導と評価手法を充実させ、生徒の資質・能力の向上を図っていきたい。

参考文献等

- 投野由紀夫（編）（2013）『CAN-DOリスト作成・活用 英語到達度指標CEFR-Jガイドブック』東京：大修館書店
- 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』文部科学省
- Brown, J. D. (2012). *Developing, using, and analyzing rubrics in language assessment with case studies in Asian and Pacific languages*. National Foreign Language Resource Center, University of Hawaii at Manoa.

巻末資料①

平成27年度 1年生 第2回スピーキングテスト実施要項

目的 積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するため、日々の授業で身に付けたコミュニケーション能力（スピーキング能力）を確認し、活発な言語活動の一助とする。

対象 1学年全員

科目 英語表現 I

日程 12月10日(木)～12月16日(水)までの間で、1クラスにつき2時間分の授業で実施する。
原則、授業時間を利用する。ただし、予想以上に時間を要する場合は、昼放課や授業後を利用する。

会場 面接教室 → 移動教室

役割 自習教室 → HR教室

面接官1名

教室監督1名

各担当者で相談して決めてください。

実施方法 質問リストを事前に生徒に提示し（原則テストの1週間前にプリントを配布し説明をする）、当日までに準備するよう指示。生徒には評価の観点を前もって伝えておく。当日、生徒は各教室でインタビューテストの勉強、あるいは自習を行う。今回は、奇数のクラス→偶数のクラスの順番で面接を行う。自分の順番が来たら、生徒は試験会場へ移動し、一人ずつ試験官とインタビューを行う。（1番の者が試験を受けている間、後5名の者は廊下の椅子で静かに待機する。）試験官はインタビューの内容を録音し、必要であれば、後ほど担当教員らで評価する。基本的にはその場で評価をする。インタビューが終わった生徒は、教室に戻り、静かに自習する。

試験時間 一人2～3分程度とする。質問は以下のようにする。

<質問リスト>

[Warm-up]

① Can you tell me your name?
② How are you today?

[A]

① What do you usually do during breaks?
② What subject do you like?
③ What animals do you like?
④ What do you want to be in the future?

[B]

Look at the picture card (A), (B) or (C).
Describe what they are doing as much as possible.
You have 30 seconds to answer.

[C]

* 原則3文以上。
① Tell me about what you like about your town.
② Tell me about your favorite movie or book.
③ Tell me about what you have done many times in your life.

第2回スピーキングテスト

評価表 ()組()番 氏名()

項目	評価基準	評価	点数	結果
Attitude	積極的に取り組む姿勢が見られる。	A	2	
	取り組もうとしている。	B	1	
	取り組む姿勢が見られない。	C	0	
【A】	フルセンテンスで答えている。語彙・文法の間違いはなく、必要な情報を正しく伝えることができる。	A	5	
	フルセンテンスで答えているが、語彙・文法の間違いや、必要な情報を伝えることはできていない。	B	4	
	フルセンテンス、句、語で答えている。しかし、語彙・文法の間違いやにより、質問の内容が正しく伝わらない。	C	2	
	質問を間違えて理解し、答えている。	D	0	
	質問が理解できない。何も答えることができない。			
【B】	4枚の絵の状況を適切に描写できている。	A	5	
	3枚の絵の状況を適切に描写できている。	B	4	
	2枚の絵の状況を適切に描写できている。	C	3	
【C】	1枚の絵の状況を適切に描写できている。	D	2	
	絵の状況を全く描写できていない。	E	0	
	3文以上の英文で答えている。聞き手に必要な情報を正しく伝えることができている。内容に誤解を招くような語彙・文法の間違いはほとんどない。	A	8	
	3文以上の英文で答えている。内容に誤解を招くような語彙・文法の間違いやがあるが、必要な情報をある程度伝えることができている。	B	6	
	3文以上の英文で答えている。内容に誤解を招くような語彙・文法の間違いやがあり、理解が難しい部分がある。	C	4	
TOTAL	1文～2文の英文で答えている。内容に誤解を招くような語彙・文法の間違いはほとんどない。	D	2	
	質問に対して答えているが、聞き手に必要な情報があまり伝わらない。語彙・文法の間違いやが多い。	E	0	
	質問が理解できず、何も答えることができない。			
			/20	

巻末資料②

平成27年度 2年生 第1回スピーキングテスト実施要項

目的 積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するため、日々の授業で身に付けたコミュニケーション能力(スピーキング能力)を確認し、活発な言語活動の一助とする。

対象 2学年全員

科目 コミュニケーション英語Ⅱ

日程 6月1日(月)から12日(金)までの1～2時間を使用して実施する。

会場 ホームルーム教室

評価方法・教員がルーブリックを用いて評価をする。

- ・Content(1)(2)の部分は Worksheet を提出させた時点で評価を行う。その後、添削をして清書→発表。
- ・生徒もルーブリックを用いて評価をするが、成績には入れない。

実施方法 ①事前に修学旅行についてのスピーチを行うので、現地で写真を撮ったりして準備をするように指示する。

- ②授業時間を1～2時間程度利用して、スピーキングテストの説明、原稿作成などを行う。
- ③授業時間を1～2時間程度利用して発表を行う。生徒は相互評価を行う。教員も同時に評価をする。また、ボイスレコーダー(ビデオカメラ)で記録する。

CAN-DO リスト 【話す(発表④)】

写真や絵、地図などの視覚的補助を利用しながら、一連の簡単な語句や文を使って、自分の毎日の生活に直接関係のあるトピック(自分のこと、学校のこと、地域のことなど)について、短いスピーチをすることができる。

その他 原稿をつくる際はペア、グループワークで行う。

<生徒への指示(抜粋)>

SCHOOL TRIP TO OKINAWA



★ANNOUNCEMENT

第1回スピーキングテスト(スピーチ)を実施します。

今回は、修学旅行の思い出についてスピーチ(1分程度)を作成し、発表してもらいます。発表のときは写真(現像したもの、スマホは不可)や思い出の品を持ってきて下さい。

用意できない場合は減点となります。

★CAN-DO リスト

写真や絵、地図などの視覚的補助を利用しながら、一連の簡単な語句や文を使って、自分の毎日の生活に直接関係のあるトピック(自分のこと、学校のこと、地域のことなど)について、短いスピーチをすることができる。

RUBRIC FOR TEACHER (評価表)

評価項目	評価基準		
Content (1)	3文以上の英文が書かれており、聞き手に伝わり易いよう工夫されている。	3文以上の英文が書かれているが、工夫が感じられない。	何を伝えたいのかわからない部分が目立つ。3文書かれていない。
Content (2)	5	3	0
	3文以上の英文が書かれており、聞き手に伝わり易いよう工夫されている。	3文以上の英文が書かれているが、工夫が感じられない。	何を伝えたいのかわからない部分が目立つ。3文書かれていない。
Voice	5	3	0
	適度な音量で、はっきりと最後まで聞き取れる。	声がやや小さい/大きい。聞き取ることができない。	声が小さすぎて聞き取ることができない。
	2	1	0
	発音やアクセントを意識して読むことができる。滑らかである。	少々ごちないが、発音やアクセントを意識している。	発音やアクセントをまったく意識していない。間違えが多々ある。
Non-verbal communication	2	1	0
	適度に聞いている人たちを見たり、効果的に身振り手振りをすることができている。品物や写真などを用いて発表している。	目線や身振り手振りを意識することができ。品物や写真などを表している。	目線や身振り手振りをまったく意識することができない。あるいは、品物や写真を用いていない。
Memorization	3	2	0
	原稿を一度も見ずに、滞りなく発表することができる。	ときどき原稿を見ることがある。	原稿から目が離せない。
	3	2	0

Total Score

巻末資料③

平成27年度 3年生 第1回スピーキングテスト実施要項

1. 目的

積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するため、日々の授業で身に付けたコミュニケーション能力（スピーキング能力）を確認し、活発な言語活動の一助とする。本テストの点数は、3学期の成績に加算する。

2. 目標

Can-Do 到達目標【話す（発表） - 5】

使える語句や表現を繋いで、自分の経験や夢、希望を順序立てて、話を広げながら、ある程度詳しく語ることができる。

3. 対象 第3学年全員

4. 実施科目 コミュニケーション英語III

5. 日程

12月7日（月）～12月18日（金）にスピーチ発表を実施する。

所要時間 (1) 準備：1時間（発表日の1週間前）

(2) 発表：2時間（発表時間1人1分～2分）

6. 会場 ホームルーム教室

7. 実施方法

「高校生の制服着用に着成か反対か」(ライティングテストと同じ)をテーマにスピーチを作成する。

ライティングテストの作品を発表原稿に用いる。

希望者は、英語表現の授業担当者に添削指導を1回依頼してもよい。

発表時には、視覚的補助として、ポスター等を1枚（A3サイズ）まで利用してもよい。

発表時に、準備した原稿を見てもよいが、原稿を見ながらの発表は評価が下がる。

クラス全体の前で発表する。発表時間は1分以上、2分以内とする。

8. 評価方法

教員が「9. 評価表」を用いて20点満点で評価をする。

発表時間の計測用にストップウォッチを使う。

発表中に日本語を使った場合、0点とする。

生徒同士でも評価をするが、成績には入れない。

発表内容は、記録のためICレコーダーで録音する。

9. 評価表

声量	聞きやすい音量	やや声が小さい	聞き取れない	点
	3点	1点	0点 ※1	点
時間	1分～2分	30秒～1分または2分超過	30秒以内	点
	3点	2点	0点 ※1	点
原稿の暗記	原稿を見ずに発表した	少し原稿から目が離れた	終始原稿を読んだ	点
	3点	2点	0点	点
発音・強弱	発音の誤りがほとんどない 適切などところに強弱がある	発音の誤りはあるが内容は伝わる 少し強弱がある	発音の誤りが多く、内容が伝わりにくい 強弱がない	点
	4点	2点	0点	点
Non-verbal communication	アイコンタクトが上手く取れていて、表情が良い	アイコンタクトが少しあるが、表情がやや固い	乏しい	点
	4点	2点	0点	点
視覚的補助	視覚的補助を上手く活用	視覚的補助はあるが、効果的でない	なし	点
	3点	1点	0点	点
合計	20点満点			点

※1 「声量」「時間」のいずれかが0点の者は、それ以降の項目は評価しない。

巻末資料④

平成27年度 1年生 第2回 ライティングテスト 実施要項

目的 積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するため、日々の授業で身につけた表現活動を利用して、記述形式で評価することにより、活発な言語活動の一助とする。

対象 1年生全員

科目 英語表現I

日程 10月19日(月)～10月23日(金)の間の1時間を利用し、実施する。
(各教科担当で設定する)

実施方法 英語表現Iの授業時に各教室で20分間(20点満点)の記述形式で行う。

試験内容

授業で学習したことを参考に、好きな本や映画を紹介する英文を書きなさい。

※生徒は、60語以上の英語を書くこと。

60語に満たない生徒は、大幅な減点対象になります。

<生徒への指示(抜粋)>

- ①ライティングテストの日程は各教科担当の指示に従ってください。
20分間の記述式テストを受けてもらいます。
点数は20点満点でテスト結果は2学期の成績に反映されます。
- ②テストの内容は以下の通りです。
授業で学習したことを参考に、好きな本や映画を紹介する英文を書きなさい。
- ③辞書の持ち込みは不可です。
- ④評価基準は別紙の通りです。
- ⑤テスト結果は後日報告します。
- ⑥不正行為が発覚した場合はゼロ点とみなします。
- ⑦語数を稼ぐために、同じ単語や文を繰り返して書く等の行為は禁止します。
そのような事実があった場合は、不正行為と見なし、ゼロ点と見なします

評価表

(1) Organization (内容の構成) 各項目ごとに評価				Score
① Introduction	導入 (introduction) 部分において、本や映画のタイトルが書かれている。	書かれている	1点	
		書かれていない	0点	
② Body	誰によって、いつ書かれた(作られた、公開された)か、誰が役者か、どのようなジャンルの映画(本)か、のいずれか2つについて書かれている。	書かれている	2点	
		書かれていない	0点	
③ Body	本や映画の内容が書かれている。	5文以上	4点	
		3～4文	3点	
		1～2文	2点	
		書かれていない	0点	
④ Body	本や映画に対する自分の感想や意見が書かれている。	書かれている	2点	
		書かれていない	0点	
⑤ Conclusion	スピーチを締めくくる内容が書かれている。	書かれている	1点	
		書かれていない	0点	
(2) Accuracy (センテンスレベルの正確さ・意味の正確さ) (5段階評価)				Score
センテンスにはほぼ間違いがない。語句が適切に使われて自然な英語である。文の長さが適当である。※3単元のS、冠詞、スペリングにミスは1～2つ。 ※文法上の間違いは0～1個				10
3単元のSや、冠詞、スペリングのミスがあるが、理解には支障をきたさない(上記のミスの数については合計で3～6個を目安)。その他における文法上の間違いがほとんどない(文法上のミスが2個～3個)。				8
SVなどの文の構造はほぼできている。文法上の間違いがある(上記に関するミスが4～5個)。				6
意味が分からない、または誤解を招く部分がほとんどない。				4
SVなどの文構造に間違いが比較的多くある。意味が分からない、または、誤解を招く部分が目立つ(上記に関するミスが6つ以上)。				2
SVなどの文構造に間違いが多くある。				1
語の意味を間違って使っており、読み手が理解できない部分が多い。				0
十分な英語が書かれていない。				0
TOTAL				

※60語に満たない作品については、(2)の項目に上限をもうける。

60語以上の作品⇒左列の数字で採点、60語未満の作品⇒右列の数字で採点。

※ただし、1文以下の作品は各項目で0点とする。

平成27年度 2年生 第1回ライティングテスト 実施要項

目的 積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するため、日々の授業で身につけた表現活動を利用して、記述形式で評価することにより、活発な言語活動の一助とする。

対象 2年生全員

科目 英語表現Ⅱ

日程 ①授業で試験内容、実施方法、評価基準の説明をする。(7月2日～8日)
 ②1st draftを提出、アンダーラインを入れて返却。(7月13日～17日)
 ③夏休み課題として、出校日に書き直し(2nd draft)を提出。(8月18日)
 ④終祭明けにライティングテストを実施。(9月9日～18日)
 ※細かい日程設定は担当教員が各自で行い、生徒に連絡する。

実施方法 ②の1st draft、③の書き直し(2nd draft)、④のライティングテスト解答用紙(最終作品)を、それぞれ20点満点で採点する。(計60点)

試験内容 アメリカ人の友人に日本の学校生活を紹介するE-mailを書く。
 ①始めの言葉、②部活動について、③学校祭について、④その他学校生活について、⑤締めめの言葉、以上について段落構成を用いて書く。80語以上書く。

評価基準 (1) 語数 (2) 内容 (3) 構成 (4) 文法の4点から評価する。

- その他
- ・②③④において、各授業担当者が監督、採点を行う。
 - ・④では採点する前の答案をコピーし、学年分まとめて保存する。
 - ・辞書の使用は禁止。
 - ・事前に生徒に対して、説明プリントを配り、評価基準を伝えておく。
 - ・テスト結果は後日返却する。

評価表

(1) Structure of content (内容の構成) 各項目ごとに評価				Score
①	Introduction	始めの言葉が書かれている。	書かれている 書かれていない	2点 0点
②	Body-1	部活動について紹介している。	2文以上 1文 0文	2点 1点 0点
③	Body-2	学校祭について紹介している。	2文以上 1文 0文	2点 1点 0点
④	Body-3	学校案内について他に情報を紹介している。	2文以上 1文 0文	2点 1点 0点
⑤	Conclusion	手紙を締めくくる内容が書かれている。	書かれている 書かれていない	2点 0点
(2) Accuracy (センテンスレベルの正確さ・意味の正確さ) (5段階評価)				Score
センテンスにはほぼ間違いがない。語句が適切に使われて自然な英語である。文の長さが適当である。※3単元のS、冠詞、スペリングにミスは1～2つ。※文法上の間違いは0～2個				10
3単元のSや、冠詞、スペリングのミスがあるが、理解には支障をきたさない(上記のミスの数については合計で3～6個を目安)。その他における文法上の間違いがほとんどない(文法上のミスが3個～4個)。				8
SVなどの文の構造はほぼできてきている。文法上の間違いがある(上記に関するミスが4～5個)。				6
意味が分らない、または誤解を招く部分が多量にある。				5
SVなどの文構造に間違いが目立つ。意味が分らない、または、誤解を招く部分が目立つ(上記に関するミスが6つ以上)。語の意味を間違えて使っており、読み手が理解できない部分が多い。				3
十分な英語(※30語に満たないもの)が書かれていない。				0
TOTAL				

※80語に満たない作品については、(2)の項目に上限をもうける。
 80語以上の作品⇒左列の数字で採点、80語未満の作品⇒右列の数字で採点。

巻末資料⑥

平成27年度 3年生 第1回 ライティングテスト 実施要項

目的 積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するため、日々の授業で身につけた表現活動を利用して、記述形式で評価することにより、活発な言語活動の一助とする。

対象 3年生全員

科目 英語表現Ⅱ

日程 11月2日(月)～11月6日(金)の間の1時間を利用し、実施する。

実施方法 英語表現Ⅱの授業時に各教室で20分間(20点満点)の記述形式で行う。

試験内容 制服に賛成か反対かを英語で述べただし以下の5つの内容を含める
 ①制服に賛成か反対か、自分の意見
 ②その根拠(なぜ制服(OR私服)がよいのか)
 ③自分の意見に対する反論
 ④その反論に対する反論
 ⑤まとめ

次の三つの表現をそれぞれ1回は使うこと

①不定詞、②接続詞、③関係詞
 評価基準 (1)語数(2)表現(3)文法(4)構成(5)内容(6)holistic impressionの6点から評価する。

Can Do List:【書くこと①】自分に直接関わりのある環境(学校、職場、地域など)での出来事を、身近な状況で使われる語彙・文法を用いて、ある程度まとまりのあるかたちで、描写することができる。

その他 各授業担当者が監督、採点を行う。
 生徒は辞書(紙辞書、電子辞書問わない)を持ち込むことができが、辞書の例文をそのまま引用することは禁止とする。そのようなことがあった場合、評価しない。**50語**以上書くことを原則とする。白紙の場合は評価しない。
 事前に生徒に対して、説明プリントを配り、評価基準を伝えておく。
 テスト結果は後日返却する。

評価表

評価項目	評価基準						SCORE
※1 50語未満	指定された表現がすべて適切に使われている。6	指定された表現のうち、2つが適切に使われている。普通。4	指定された表現の2つ以上が適切に使われていない。0	指定された表現がきちんとしている。わかりやすい。2	一つの段落に2つ以上の内容が混在している箇所が1つ見受けられる。1	段落構成を全く無視している。0	
※2 50語以上	全ての要素が書かれている。8	①～④の要素が書かれている。6	①～③の要素が書かれている。4	①～④の要素が書かれている。4	①②の要素が書かれている。2	①②の要素が不明瞭である。0	
内容	文法的なミスはほとんどみられない(冠詞や複数形などのミスレベルが5程度まで)。2	文法的なミスはみられるが、内容はわかる。	文法的なミスはみられるが、内容はわかる。	文法的なミスはみられるが、内容はわかる。	文法のルールをまったく無視している。		
文法	優れた内容である。2	言いたいことは理解できる。普通。1	言いたいことは理解できる。普通。1	言いたいことは理解できる。普通。1	言いたいことが明確に伝わらない。0		
holistic impression							
TOTAL SCORE							/20

- ※1 50語未満は、表現と構成の2つの要素のみを評価し、採点する。
- ※2 50語以上は、表現と構成に加えて、内容、文法、holistic impressionの5つの要素をすべて評価し採点する。

ライティングテストに向けて身につけたい表現

- ①I agree to ～: 私は～に賛成です
- ②I disagree to ～: 私は～に反対です
- ③I think that S V: 私はSがVすると思う
- ④Some people say that S V: SがVすると思う人がいる
- ⑤However, I think that S V: しかし、私はSがVすると思う
- ⑥That's why S V: そんなわけでSはVする

Scoring Rubric: Essays

EVALUATOR _____

DATE _____

STUDENT _____

	Score	Description
Content	5-6	The essay stays relevant to the task without unnecessary details. It provides effective reasons/experiences/examples that are persuasive and interesting. It is a sufficient length.
	3-4	The essay is mostly relevant to the task with some unnecessary details. It provides some reasons/experiences/examples that are somewhat effective. It is not quite a sufficient length.
	1-2	The essay has limited relevance to the task with unnecessary details. It does not provide effective reasons/experiences/examples. It is not a sufficient length.
	0	The essay has no relevance to the task. It does not provide any reasons/experiences/examples. It is too short or there is not enough to mark.
Organization	5	The essay has a near perfect structure with an introduction that states the task topic, a body that gives concise reasons and examples and a conclusion which restates the topic. There is a high level of cohesion and logical sequencing throughout.
	3-4	The essay has some structural errors but a clear introduction, body and conclusion. There is a good level of cohesion and sequencing with some minor mistakes.
	1-2	The essay has limited structure with a poor or incorrect introduction, body and conclusion. Some sentences may be put in the wrong section. There is a limited knowledge of sequencing and cohesion.
	0	The essay has no structure, lacking a clear introduction, body and conclusion. There is no cohesion or logical sequencing. There is not enough to mark.
Grammar	4	This essay has near perfect usage of grammar structures: Prepositions, verb forms (ex, tense, gerund, infinitive), syntax, articles, singular, plurals. The entire essay is clear and understandable.
	2-3	This essay has some - very few grammatical errors: Prepositions, verb forms (ex, tense, gerund, infinitive), syntax, articles, singular, plurals. Some sentences may be unclear or lose the intended meaning.
	1	This essay has limited knowledge of grammar structures: Prepositions, verb forms (ex, tense, gerund, infinitive), syntax, articles, singular, plurals. It is often difficult to understand the intended meaning.
	0	This essay has no correctly used grammar structures: Prepositions, verb forms (ex, tense, gerund, infinitive), syntax, articles, singular, plurals. It is entirely unclear or confusing. There is not enough to mark.
Vocabulary	3	This essay has a wide range of vocabulary with very limited or no repetition and appropriate usage.
	2	This essay has a fair range of vocabulary with some repetition and mostly appropriate usage.
	1	This essay has a limited range of vocabulary with much repetition and frequent errors of word choice/meaning.
	0	This essay has a very limited range of vocabulary with extensive repetition and almost no correct word choice or meaning. There is not enough to mark.
Mechanics	2	This essay has almost perfect usage of punctuation, capitalization and correct spelling.
	1	This essay has some mistakes in punctuation and capitalization as well as frequent spelling errors.
	0	This essay has many mistakes in punctuation, capitalization and excessive spelling errors. There is not enough to mark.
Total Score		

巻末資料⑧

愛知県立惟信高等学校 平成27年度入学生用 CAN-DO リスト (1版)

	1年	2年	3年
<p><理解> 読むこと Reading</p>	<p>1-1 コミュニケーション英語Ⅰの教科書(1600語レベル)を読んで、概要や要点をとらえることができる。</p> <p>1-1 かなり配慮して、1文ずつ、ゆっくりに話してもらえば、教師による英語での簡単な指示・説明を聴いて理解することができる。</p> <p>1-2 かなり配慮して、1文ずつ、ゆっくりに話してもらえば、ごく簡単な英語で話された、事物に関する紹介や対話を聞いて、情報や考えを理解したり、概要や要点をとらえたりすることができる。</p>	<p>2-1 コミュニケーション英語Ⅱの教科書(2300語レベル)について、速読したり精読するなど目的に応じた読み方ができる。</p> <p>2-1 ある程度配慮して話してもらえば、教師に英語での指示・説明を聴いて理解することができる。</p> <p>2-2 ある程度配慮して話してもらえば、簡単な英語で話された、事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりすることができる。</p>	<p>3-1 コミュニケーション英語Ⅲの教科書(3000語レベル)について、速読したり精読するなど目的に応じた読み方ができる。</p> <p>3-2 看板、メニュー、携帯メール、簡単なボスターや招待状等の日常生活で使われている非常に短い簡単な文章を読み、理解することができる。</p> <p>3-3 簡単な英語で表現されれば、旅行ガイドブック、レシピなど実用的・具体的で内容が予想できるものから必要な情報を探すことができる。</p>
<p><理解> 聞くこと Listening</p>	<p>1-1 かなり配慮して、1文ずつ、ゆっくりに話してもらえば、教師による英語での簡単な指示・説明を聴いて理解することができる。</p> <p>1-2 かなり配慮して、1文ずつ、ゆっくりに話してもらえば、ごく簡単な英語で話された、事物に関する紹介や対話を聞いて、情報や考えを理解したり、概要や要点をとらえたりすることができる。</p>	<p>2-1 ある程度配慮して話してもらえば、教師に英語での指示・説明を聴いて理解することができる。</p> <p>2-2 ある程度配慮して話してもらえば、簡単な英語で話された、事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりすることができる。</p>	<p>3-1 はっきりとした発音で話してもらえば、教師による英語での指示・説明を聴いて理解することができる。</p> <p>3-2 はっきりとした発音で話してもらえば、分かりやすい展開の、事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりすることができる。</p>
<p><話すこと> 発表 Spoken Production</p>	<p>1-1 英語の授業の中で、教師に簡単な質問をしたり、許可を求めることができる。</p> <p>1-2 絵を見て、風景や状況を、簡単な語や基礎的な句を限られた構文を用い、簡単な文で描写することができる。</p> <p>1-3 前もって話すことを用意した上で、基礎的な語句、定型表現を用いて、人前で実物を見せながらその物を説明することができる。</p> <p>1-4 基礎的な語句、定型表現を用いて、限られた個人情報(家族や趣味など)や簡単な情報(時間や日時、場所など)を伝えることができる。</p> <p>1-5 前もって発話することを用意した上で、限られた身近なトピックについて、簡単な語や基礎的な句を限られた構文を用い、簡単な意見を言うことができる。</p>	<p>2-1 英語の授業の中で、教師に質問をしたり、許可を求めることができる。</p> <p>2-2 絵を見て、風景や状況を、簡単な語や基礎的な句を限られた構文を用い、複数の文で描写できる。</p> <p>2-3 一連の簡単な語句や文を使って、自分の趣味や特技に触れながら自己紹介をすることができる。</p> <p>2-4 写真や絵、地図などの視覚的補助を利用しながら、一連の簡単な語句や文を使って、自分の毎日の生活に直接関係のあるトピック(自分のこと、学校のこと、地域のことなど)について、短いスピーチをすることができる。</p> <p>2-5 一連の簡単な語句や文を使って、意見や行動計画を、理由をあげて短く述べるることができる。</p>	<p>3-1 英語の授業の中で、教師に質問をしたり、許可を求めることができる。</p> <p>3-2 絵を見て、風景や状況を、簡単な語や基礎的な句を限られた構文を用い、複数の文で描写できる。</p> <p>3-3 写真や絵、地図などの視覚的補助を利用しながら、一連の簡単な語句や文を使って、自分の毎日の生活に直接関係のあるトピック(自分のこと、学校のこと、地域のことなど)について、短いスピーチをすることができる。</p> <p>3-4 一連の簡単な語句や文を使って、意見や行動計画を、理由をあげて短く述べるることができる。</p> <p>3-5 使える語句や表現を繋いで、自分の経験や夢、希望を順序だてて、話を広げながら、ある程度詳しく語ることができる。</p>
<p><話すこと> やりとり Spoken Interaction</p>	<p>1-1 教師による、英語での簡単な指示に対して簡単な応答することができる。</p> <p>1-2 あいさつをはじめとして、簡単なやりとりをかわすことができる。</p> <p>1-3 なじみのある定型表現を使って、時間・日にち・場所について質問したり、質問に答えたりすることができる。</p> <p>1-4 家族、日課、趣味などの個人的なトピックについて、(必ずしも正確ではないが)なじみのある表現や基礎的な文を使って、質問したり、質問に答えたりすることができる。</p>	<p>2-1 教師による、英語での指示・説明に応答することができる。</p> <p>2-2 自分のことなど、なじみのある話題について英語で短いやりとりができる。</p> <p>2-3 基本的な語や言い回しを使って日常のやりとり(何ができるかできないかや色についてのやりとりなど)において単純に応答することができる。</p> <p>2-4 趣味、部活動などのなじみのあるトピックに関して、はっきりと話されれば、簡単な質疑応答をすることができる。</p> <p>2-5 基本的な語や言い回しを使って、人を誘ったり、誘いを受けたり、断ったりすることができる。</p>	<p>3-1 教師による、英語での指示・説明に応答することができる。</p> <p>3-2 簡単な英語で、意見や気持ちをやりとりしたり、賛成や反対などの自分の意見を伝えたり、物や人を比べたりすることができる。</p> <p>3-3 予測できる日常的な状況(郵便局・駅・店など)ならば、様々な語句や表を用いてやりとりができる。</p> <p>3-4 身近なトピック(学校・趣味・将来の希望)について、簡単な英語を幅広く使って意見を表明し、情報を交換することができる。</p>
<p><書くこと> 書くこと Writing</p>	<p>1-1 簡単な語や基礎的な表現を用いて、身近なこと(好き嫌い、家族、学校生活など)について短い文章を書くことができる。</p> <p>1-2 自分の経験について、辞書を用いて、短い文章を書くことができる。</p> <p>1-3 趣味や好き嫌いについて複数の文を用いて、簡単な語や基礎的な表現を使って書くことができる。</p> <p>1-4 日常的・個人的な内容であれば、招待状、私的な手紙、メモ、メッセージなどを簡単な英語で書くことができる。</p>	<p>2-1 文と文を and、but、because などの簡単な接続詞でつなげるような書き方であれば、基礎的・具体的な語彙、簡単な句や文を使った簡単な英語で、日記や写真、事物の説明文などのまとまりのある文章を書くことができる。</p> <p>2-2 身の回りの出来事や趣味、場所などについて、個人的経験や自分に直接必要のある領域での事柄であれば、簡単な描写ができる。</p> <p>2-3 聞いたり読んだりした内容(生活や文化の紹介などの説明や物語)であれば、基礎的な日常生活語彙や表現を用いて、感想や意見などを短く書くことができる。</p>	<p>3-1 自分に直接関わりのある環境(学校、職場、地域など)の出来事を、身近な状況で使われる語彙・文法を用いて、ある程度まとまりのあるものあるかたちで、描写することができる。</p> <p>3-2 身近な状況で使われる語彙・文法を用いれば、道筋を立てて、作業の手順などを示す説明文を書くことができる。</p>
<p>外部指標 <目標></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・英検3級(全員) ・英検準2級(5%;18名) ・受容語彙:2000語 <p>*中学校(1200)+コミュ英I(400)=1600語</p> <p>*英検3級+中学卒業程度(2000語レベル)</p> <p>[身近な英語を理解し、また使用することができる。]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・英検準2級(15%;45名) ・英検2級(1%;3名) ・受容語彙:3600語 <p>*1年次まで(1600)+コミュ英II(700)=2300語</p> <p>*英検準2級+高校中級程度(3600語レベル)</p> <p>[日常生活に必要な英語を理解し、また使用することができる。]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・英検準2級(40%;140名) ・英検2級(3%;10名) ・受容語彙5000語 <p>*2年次まで+コミュニケーション英語III(700)=3000語</p> <p>*センター試験(4000語超)</p> <p>*英検2級+高校卒業程度(5000語レベル)</p> <p>[社会生活に必要な英語を理解し、また使用することができる。]</p>